

ぐるっけ

4. 2003



膝元

品川鈴子

花芭蕉火車の煽りに頷きぬ

茶の花の低き垣もて家鴨園

鶯の糞袈裟懸けに親鶯像

黒文字に粉のいくばく鶯餅



落ち椿紅のなだれる本丸跡

冴え返る膝元にユダ、ブルータス

乗り違へ沿線花見ゆくりなく

文政の絵馬に朱残る花明り

鳥辺野の花に面影甦る

喪^{うしな}ふを転のはづみに余花仰ぐ



玉鈴吟

大阪 小林 玲子

音もせで湖凍りゆく真中より
先頭を歩き氷湖をひとり占め
浮寝鳥保護区なること知りいるや
浮寝鳥守人犬をおそれける
冬濤のしぶき窓まで函館線

兵庫 齊藤由美子

春あけぼの覚めて齢ひを重ねけり
絵踏み思ふ中也の街のマンホール
桜東風竹刀を合はすをみな声
炯々と片目見開き恋の猫
逝く春の白墨の手を洗ひけり

兵庫 坂口三保子

稲荷山続く鳥居に初日差す
鯉から鯉へ移る寒雀
漁舟笹立て注連を回らせる
漁舟飾り碓り括りたる
冬浪がテトラポットの奥にまで

愛媛 鈴木てるみ

冬凧の磯香枕に納め句座
分離帯はハイビスカスの室戸なり
新蕎麦を挽く落人の粉挽唄
長靴の館長聖樹に点灯す
弦之丞召捕ってしまえ冬芝居

香川 陶山 泰子

木像の中に仏舍利冬ぬくし
十二支に守らる御堂神の留守
日向ぼこ豚をペットに飼う時代
懐手して開店を待つばかり
止められぬ推理小説年の暮

愛媛 武司 琴子

皺かくすクリーム試し初笑ひ
七日粥妣の残せし厨事
登校の大股小股霜ひかる
何をしに座敷へ来しか噓三つ
冬桜寝不足の目を凝らしたり

大阪 竹下昭子

一枚の賀状届かぬ憂いあり
虬犬の肥りしことを初日記
ふしくれの指いとおしき初鏡
白朮火を授かる誰も頬染めて
落人の村越えてきし水仙郷

和歌山 田中嘉代子

白装束ひとり黒靴寒行女
築小屋に棲みつきたるか虎落笛
抽ん出て紅の鉾立つ花アロエ
深庇軒に吊りたる凍み豆腐
漂着の流水大きシャーベット

兵庫 田中敏文

福笹の金の俵が日を撥ねる
親と子の出店の準備寒の宮
ラジコンカーひつくり返る枯公園
携帯のボタン忙しや春隣
舞台より舞妓もまじり豆を撒く

兵庫 田中倫代

出し雑魚の立ち泳ぎする松の内
時差惚けの戻らぬままに小正月
凍星に背を向けてゐるサキソフォン
十階の仏蘭西料理春を待つ
この家も大根炊いてゐるらしき

大阪 谷泰子

菓祖の神料理の神も師走入り
蛮カラの寮歌聞こゆる枯木山
走り根に傾く志士の墓冨ゆる
錫杖を持ち底冷えの窟佛
年の瀬の洛中走るレトロバス

愛媛 筒井圭子朗

温石を取替へ座業の楮漉く
入りたくなりて近寄る焚火の輪
どか雪に埋まる人工降雪機
初詣墨の乾かぬ絵馬吊す
七種の白根を曲げしパツク透く

薬草歳時記

(一〇七)山椒(サンシヨウ)

牛尾 曜子

学名は、*Zanthoxylum piperitum* で黄色の肌をもち、胡椒のような辛味があるという意味です。和名の山椒も同じ発想によります。ジャパニーズペッパーとか古名ハジカミも独特の辛味をとりあげています。

北海道から九州まで広く分布する日本固有といってもよい落葉低木で、近畿では老ノ坡山地(ポンポン山)に自生品がみられる。中国には野生品はなく、山椒も漢名ではない。好ましい芳香の本体は、フェランドレン、オイゲノールとシトロネラルにある。かつて香料業界では、熱帯産の原料精油シトロネラ油をサンシヨウ油と称して取引されていた。

一方辛味は、サンシヨオール、サンシヨアミドとされ、舌のしびれる麻痺作用もあり、その麻痺作用を活かして、かつて魚毒による漁法が行われた。

代表的な利用法としては、新芽には独特の芳香と辛味が

あり、食欲をそそり、木の芽と呼ばれ、料理に重宝されている。花は花山椒、若い果実を実山椒といって、佃煮に喜ばれ、成熟した果実から種子を除いて粉末にしたものが粉山椒で焼き鳥、かば焼、七味唐辛子等に利用される。葉も最近では温室栽培した若葉が料理の添え物として用いられる。材は黄色で堅く長持ちし、しかも良い香りがするので、最高級すりこ木として何代にもわたり使える。

薬用として健胃、胃腸力カタル、胃拡張、胃下垂などに果皮の粉末を飲む。皮膚のかぶれには、乾燥した果皮の煎汁を患部に塗る。また、乾燥した種子を利尿や回虫駆除に煎じて飲む。漢方では大建中湯、椒梅湯ワカキ心湯などに配合され、民間伝承薬としてうるしかぶれ、ひび、あかぎれ歯痛に用いられる。

サンシヨウの香りと辛さは大脳を刺激します、疲れた時に一粒かむと、口の中がしびれるほどです。山を歩いていて見つけたら、ポケットに少々採って入れておくといい。というおすすめの本書もあります。

参考文献

「身近な薬草」

婦人生活社

「漢方の科学」

講談社

「薬草の自然療法」

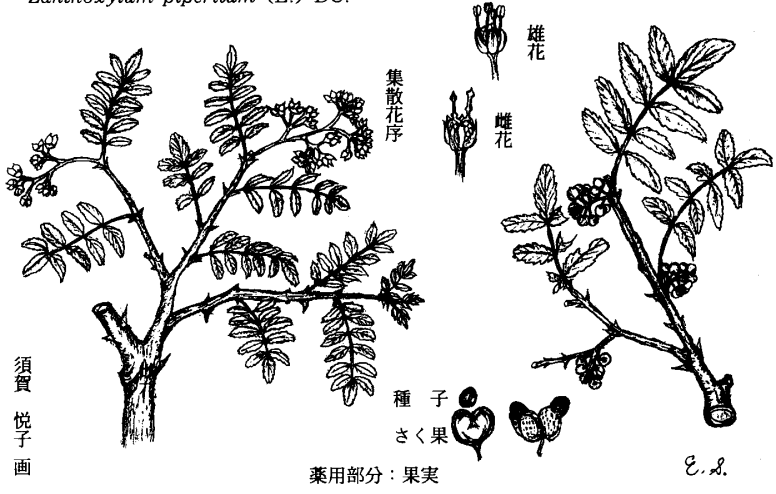
池田書店

「薬になる野の花庭の花」日本放送出版協会

著者略歴

神戸薬科大学卒

サンショウ [サンショウ属] (みかん科) 山椒
Zanthoxylum piperitum (L.) DC.



みどり児のごとまるまると山椒の芽	木の芽和田園雨の濃き日かな	隣家といさかひ絶えぬ山椒の芽	柔ら芽の山椒摘めり紙の上	青年を摘む匂ひして山椒の芽	寺の水飲めば山椒の芽が匂ふ	山椒摘む昼三ヶ月のありどころ	山椒の芽やはじめても逢ふごとし	ふつとふるさとのことが山椒の芽	山椒をつかみ込んだる小なべかな
山口 博通	徳永山冬子	森田 游水	鈴木 元	星野 明世	青柳志解樹	神蔵 器	井沢 正江	種田山頭火	小林 一茶

鈴の奏

品川 鈴子 選

一人居の少し贅沢袖子の風呂呂 兵庫 恒成久美子

教会の尖塔すべり寒鴉

舊かなもよめて少年歌留多とり

幼子も神籤をせがむ初詣

番犬を瞳で撫でて初詣 香川 大空 純子

二度寝して見し初夢に麗うまされる

投げ餌の軌跡と共に冬鷗

小春日に正座は除々に丸まる背

心なき流布聞き流す冬薔薇 愛媛 伊藤 康子

日めくりの滓の厚みや年惜しむ

父と子の声弾け飛ぶ初稽古

仕上がりは吾に似てをり福笑ひ

お隣の味噌汁届く風邪見舞 愛媛 垂水イツ子

初髪に注文つけるおませ振り

名を書きし齒ブラシ増ゆる年新た

島とんど臨時便より人どつと

残生を託してめくる初暦 兵庫 平尾 隆士

浅漬のひと皿で足る身の恙

数へ日やゆきかふ人の大荷物

雲水の残しゆく風年の内

髪カツト冷え心地よし初仕事 大阪 千島 町子

大寒や引退もよし再起よし

味覚遺伝世に柿もあり海鼠あり

新年会酒のうましや笑み絶えず 兵庫 三上富佐子

クリスマス蒸籠の前の客となる

初場所のテレビの前に四股踏む児

割箸に水飴絡め女正月

竹箒使ひ癖あり枯芙蓉

二段飛びして急行に初句会 大阪 丸 美砂子

元日や母の挿したる蒔絵櫛

分け隔てなき初日浴ぶ路地雀

肩揺すりゆすり男の初詣

留学生連れて賀客となりにけり 香川 島内 美佳

留学生にしきたり教え初詣

秀 鈴 記

巻頭三句 品川 鈴子 評

四句〜十五句 武司 琴子 "

* 選句は全て 品川 鈴子

舊かなもよめて少年歌留多とり 恒成久美子

新かなに慣れた現代つ子が百人一首の旧仮名が読める
とは頼もしい。少年期は記憶力も良くて、歌留多もす
すらすらと手速く取れるのでしよう。その頃に憶えたことは、
生涯忘れず、身に付いた宝となる筈…。上五に懐かしい
漢字が使われているのも効果的。

番犬を瞳で撫でて初詣 大空 純子

番犬は外で飼うので正月の晴着に跳びつかれては、よ
そゆきが台無しとなる。後を追うけれど人込みへは連れ
ても行けず、「よしよし」と目つきで撫でて出かける優し
さ。目で口替りにものを言う飼い主。

日めくりの滓の厚みや年惜しむ 伊藤 康子

日めくりの千切った残り滓、その高には日々の喜怒哀
楽が籠っていて、おろそかな積み重ねではない。取り戻
すことの出来ない年への惜別感が凝縮された厚み。

お隣の味噌汁届く風邪見舞 垂水イツ子

困った時、助け合い励まし合えるのが隣同士。だから
一杯の熱い味噌汁で風邪見舞ができる。蓋を取るとプー
ンと柔らかい味噌の匂い葱の高い香り。美味しい幸せを
味わう風邪見舞い品。病んで知る人の心の温かさに胸が
熱く涙の滲む思いがする。

残生を託してめくる初暦 平尾 隆士

初暦に託す心は若き頃も老いても同じだ。気は若く持
ちたいが、残生と認めざるをえない複雑な心境と逼迫感
が読みとれる。今年も頑張ろうなしっかり頼んだぞと暦

に自分の命を感じているのだ。老境を淡々と詠んだ滋味溢れる句。更に深く人生を探究されるだろう。

髪カット冷え心地よし初仕事

千島 町子

長い髪を一転カットした清々しい気分を初仕事に結びつけた点がこの句の魅力だ。「カット」と「冷え」の簡潔な表現に爽やかさを感じ、その上に「心地よし」と極めつけたところに清新な句風を偲ばせる。初仕事に髪型も改め、さすが清楚な女性を見る思いだ。

初場所のテレビの前に四股踏み

三上富佐子

一年六場所の中の初場所は寒中だがテレビ観戦で家族中楽しめる。人気力士を応援する勢いによちよち歩きの子供も釣られて力士の真似をする。無心な児の仕種は大人には微笑ましいものに映る。テレビより四股を踏み児に歓声が湧くのだ。読む者も誘い込まれる。

二段飛びして急行に初句会

丸 美砂子

何と凄いきなみだらう。「二段飛び」の躍動をずばり上段に詠み上げた見事さ！初句会の若々しい気分についてより念入りの支度で時間に焦りつつ駅へ一目散。やれやれ間に合ってよかった。二段飛びしただけあって初句会もさぞかし特選句で弾んだことだろう。

留学生にしきたり教え初詣

島内 美佳

初詣の参道に外国人をよく見かける。神への祈りの姿が日本人より落ち着いた方に以前出合った。作者の句の様な受け入れ方をしていただけだと当時の一駒に敬服。互いの国の文化やしきたりを尊重しながら日本情緒を感じとる留学生。いかにも初詣らしい。

煤払い拾ひ出したる万華鏡

伊藤マサ子

類被りに襷がけ箒に叩きの勇ましい掃除姿は昔の話ともあれ、新年を迎える煤払いに思い掛けず万華鏡が出てきた。驚きと喜びに胸が躍る。くるくる廻す度、様々な模様に見える。煤払いの汚れ物と万華鏡の美しい物との取り合わせが巧みである。(以下略)